

34 「台風19号被害防災を考える」 ～床上浸水住宅の現実と復旧の問題点 から浸水地域・住宅の防水と課題～ 防災委員会委員長 東二郎

2月26日（金）Kappa 研築工房の河原典子様を講師に、WEB形式で表題のセミナーを開催しました。申込66名、当日参加55名でした。今回のセミナーの特徴は、WEB形式ということもあって島根県松江市在住の方から参加申し込みがありました。また、女性の参加が多く22名でした。講師自身の体験を通じた講演であり、住宅の浸水被害をより身近に感じたことが要因なのかと推察致しました。

WEB形式のセミナー開催は防災委員会としても初めての試みで、反省点も多々ありました。

- ・申込者への事前のお知らせのメールには、未送信や確かに受信されたのか？の確認の難しさが分かり、その方法が課題だと思った。
- ・申込者アドレスの整理、名簿作成に時間を要した。アドレスだけでなく、携帯番号等の他の連絡先の必要がある事が分かった。

コロナ禍で、このセミナーを開催できた事は、大きな意義があり、何より建築士としての役割を再確認できたと思えました。

【参加者感想】

台風は時として甚大な被害をもたらしますが、過日の台風19号も劣らず、河川の大氾濫、暴風による建造物の倒壊・住宅の床下床上浸水被害、マンションの地下浸水被害など大変な被害をもたらしてしまいました。

ご自宅が被災（床上浸水）されたという切実な情報やその後の復旧対応について実体験を元に語っていただきました。浸水住宅の浸水対策住宅設計はどのように配慮すべきなのか、多くの事例を示していただきました。大変に参考になりました。一般的に考えられている河川による外水氾濫の他に、今回は、用水路による内水氾濫もあったとのこと。線状降水帯、ゲリラ豪雨、巨大台風によりもたらされる水害に対して、「キー」にはずの水門が管理手薄になっていた、壊れていたり、適切に機能しなかったとのこと。山林・農地の宅地開発や用水路の軽視も問題点とのこと。「関心がなくなった時、災害は起きる」の言葉は痛烈でした。コミュニティの結束が弱いから防災に立ち向かえないのではなく、逆に「み

んなが防災を考える」ことが「コミュニティが元気になる」の言葉にハッとさせられました。

地域住民と行政両者が仕掛け人なる自主防災組織が有効、「防災協定」や、防災の専門家が必要、そこに建築家の役割は大きいとのこと。水害に対してはこれからも啓蒙活動が必要であり、まだまだ未整備という感を強め、防災について考える良いきっかけになりました。
(県央支部長 西方正之)



オンライン講習会でのパソコン画面の様子

【アンケートからのご意見】

- ・セミナー内容について厳しい水害の実情とそのごの対応、展開を知る事が出来大変良かった。
- ・情報を共有しながら設計者を含め専門家が果たす役割を認識すること、議論すること、そして実践することが大切で、建築士会がこのような講習会を主催されることにとっても意義を感じました。
- ・浸水被害にあった時の具体的な専門家アドバイスのセミナーをお願いしたい。
- ・オンラインセミナーについて思った以上に臨場感があつてよかった。ただ少し時間が長めで盛り沢山すぎたのでは。
- ・今後オンラインセミナーを増やして頂きたい。
- ・業務に追われ地域ボランティアまで気が回りませんでした。問題意識を共有し発信する大切さ、改めて感じる事が出来ました。
- ・多摩川土手の決壊ではなく、中小河川からの内水氾濫の怖さを知りました。水門管理の不備、住民の浸水についての無知（無防備・・・）が災害につながる。「浸水災害防止隊」を住民で結成して備えるべきですね。
- ・応急判定士や他の講座でも、このような水害（洪水や津波）などの体験やその後の改修工事に必要なものを教えてくださると良いと思います。